



尾崎一雄と壊れた鳥居

『足が細からうと、尻の肉が落ちようと、緒方はさほど閉口もしないが、神経痛の痛みの激発には、いつも降参する。その痛みを、烈震、強震、弱震などと地震になぞらへているが、激震ぐらいになると、血液が身体の奥の方へかくれた感じで、手足は冷え、頭だけが熱っぽく、身体中、特に額や首筋から膏汗（あぶらあせ）をふき出す。-（略）-』。昭和二十四年一月、「文学会議」に発表された尾崎一雄の「痩せた雄鶏」の中の一節です。神経痛の痛みが地震の震度階で表現されていて、神経痛の痛みを知らない私にも実感としてとらえられるような気がします。

昭和23年まで、震度階は0（無感覚）から6（烈震）までの7階級にわかれていました。しかし、昭和23年6月28日におきだ福井地震（M=7.3）の地震動はあまりにも強く、震度6（烈震）でも間にあわなかったため、昭和24年に新たに震度7（激震）がつけ加えられました。尾崎一雄の神経痛の描写に福井地震の影響を読みとれそうです。

尾崎一雄の作品には、しばしば関東大震災のことがのべられています。特に、文学的自伝とも云うべき「あの日この日」（上・下、昭和50年、講談社刊）には、関東大地震当日のことが克明に書かれてい

地震で壊れた鳥居の話をして下さる尾崎一雄氏



て、その原体験を知ることができます。

『大体が宵っぱりの朝寝坊だったが、九月一日は特に朝寝をし、十一時過ぎ、母に声をかけられて渋々起き出した。』が「あの日この日」の二十三章、関東大震災、その被害状況の書き出しです。隣りの山村宅に留守番をたのまれて出かけて行き、そこの茶の間に坐り込んだ時、『一、下曾我駅に向って松田方面からやってくる汽車の音が、バカに大きいことに気づいた。——(略)——。しかし、それにしても、と私は首をひねった。——(略)——。「でかいぞ!」「地震だ!」両方一緒に叫ぶと共に、手近い西向きの濡縁から戸外へ飛び出した。飛び出した、といふより、抛り出されたと言った方がいい。——(略)——。そのとき、平家建ての家が東側へ倒壊した。それ相当の音がした筈なのに、耳に入らなかった。四方八方音だらけで、何が何だか判らなかつた。——(略)——。

五分経つたか十分経つたか、どうやら歩けさうになったので、二人は西側の道路へ出た。その道路は南から北へとかなりの坂になっていて、両側には石垣もある。北のつき当りは宗我神社で、この坂道は神社の参道である。坂下にある御影石の大鳥居が無くなっていた。——(略)——。

両方の家がつぶれて、ふだんは道路のその場所からは見えぬ富士山が、くっきりと見えた。その下の足柄、箱根の山々にはとほころ嫌はず赤ハゲの山崩れが見えるのに、富士山だけは悠然と立って、秀麗な山容をほこっていた／富士山は偉い!』と思った。——(略)—— 』

壊れた鳥居については『その鳥居の残骸が、現在私の家にある。道路から入って右側に長さ一米半、

「この織たても鳥居の廃材でつくったんですよ」



直徑六十糎ほどの御影石の丸太が寝そべっている。左側に、長さ一米弱のが立っている。庭の一隅には、もう少し小さいのが十個ばかりごろごろしている。その中の一個には、大正十二年九月一日之を建つ、と刻してある。下曽我駅の地下道が開通即日つぶれたのと同様、この大鳥居も奉納したその日に崩壊した。——（略）——』と書かれています。

私は地震の石碑のシリーズに、是非この話を入れたいと、かねてから考えていました。その思いは、尾崎一雄の作品に登場したこともある NHK 小田原通信部の加藤利之記者によってかなえられました。昭和 53 年度の文化勲章を尾崎一雄氏が受章したとき NHK のインタビューは氏の名ざしで加藤記者がおこないました。

昭和 56 年 5 月 13 日に、加藤記者の案内で下曽我の尾崎一雄邸を訪門し、庭石となっている鳥居の残骸の御影石を見せていただきました。さらに先生は「君達が来たら是非見せたいものがある」と云われ、宗我神社に案内して下さいました。そこには、嘉永三庚戌年五月吉日と刻まれた手水鉢が真二ツに割れてころがっていました。

関東大地震のさいに、ドスンとつきあげられて、パカッと割れたと云うことです。この手水鉢が作られた三年後の嘉永六年二月二日（1853 年 3 月 11 日）に M=6.5 の小田原地震がありました。嘉永の地震で割れなかった手水鉢も、関東大地震にはさすがに耐えられず、この付近の地震動のはげしさを示しているように思えました。

（平野 富雄）

関東大地震で割れた宗我神社の手水鉢

